

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 豊島慶子姉

開 会 招 詞 歴代誌上16章34-36節

\* 賛 美 歌 13:1 (ソングシート)

1. 万の<sup>よろず</sup>もの 永遠<sup>とわ</sup>に<sup>みちち</sup>しらす 御父<sup>おんいづく</sup>よ、いま<sup>くだ</sup>恵<sup>たま</sup>みを<sup>みな</sup>下<sup>くだ</sup>し給<sup>たま</sup>え、御名<sup>おんあわ</sup>を<sup>そむ</sup>ほむ<sup>つみ</sup>る

我らに。アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神<sup>かみ</sup>よ、わたしを<sup>あわ</sup>憐れ<sup>おんいづく</sup>んで<sup>ふか</sup>ください。御慈<sup>おんあわ</sup>しみ<sup>そむ</sup>をも<sup>つみ</sup>って。深<sup>あらい</sup>い<sup>つみ</sup>御憐<sup>あらい</sup>れ<sup>つみ</sup>み<sup>さ</sup>をも<sup>さ</sup>って、背<sup>そむ</sup>きの<sup>つみ</sup>罪<sup>つみ</sup>を<sup>さ</sup>ぬ<sup>さ</sup>ぐ<sup>さ</sup>い<sup>さ</sup>去<sup>さ</sup>っ<sup>さ</sup>て<sup>さ</sup>ください。わたし<sup>わが</sup>の<sup>あらい</sup>咎<sup>あらい</sup>を<sup>つみ</sup>こ<sup>きよ</sup>と<sup>きよ</sup>く<sup>きよ</sup>洗<sup>あらい</sup>い、罪<sup>つみ</sup>から<sup>あらい</sup>清<sup>あらい</sup>めて<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>ください。わたし<sup>わが</sup>は<sup>あらい</sup>咎<sup>あらい</sup>の<sup>あらい</sup>うち<sup>あらい</sup>に<sup>あらい</sup>産<sup>う</sup>み<sup>お</sup>落<sup>お</sup>と<sup>お</sup>され、母<sup>はは</sup>が<sup>あらい</sup>わたし<sup>わが</sup>を<sup>あらい</sup>身<sup>あらい</sup>ご<sup>あらい</sup>も<sup>あらい</sup>った<sup>あらい</sup>とき<sup>あらい</sup>も、わたし<sup>わが</sup>は<sup>あらい</sup>罪<sup>つみ</sup>の<sup>あらい</sup>うち<sup>あらい</sup>に<sup>あらい</sup>あ<sup>あらい</sup>った<sup>あらい</sup>の<sup>あらい</sup>です。わたし<sup>わが</sup>を<sup>あらい</sup>洗<sup>あらい</sup>って<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>ください。雪<sup>ゆき</sup>より<sup>あらい</sup>も<sup>あらい</sup>白<sup>あらい</sup>く<sup>あらい</sup>なる<sup>あらい</sup>よ<sup>あらい</sup>う<sup>あらい</sup>に。神<sup>かみ</sup>よ、わたし<sup>わが</sup>の<sup>あらい</sup>内<sup>うち</sup>に<sup>あらい</sup>清<sup>あらい</sup>い<sup>あらい</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>あらい</sup>創<sup>そう</sup>造<sup>ぞう</sup>し、新<sup>あたら</sup>しく<sup>あたら</sup>確<sup>たし</sup>かな<sup>あらい</sup>霊<sup>れい</sup>を<sup>あらい</sup>さ<sup>あらい</sup>ず<sup>あらい</sup>け<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>ください。救<sup>すく</sup>いの<sup>あらい</sup>喜<sup>よろこ</sup>び<sup>あらい</sup>を<sup>あらい</sup>再<sup>ふた</sup>び<sup>あらい</sup>わたし<sup>わが</sup>に<sup>あらい</sup>味<sup>あじ</sup>わ<sup>あらい</sup>わ<sup>あらい</sup>せ、自<sup>じ</sup>由<sup>ゆう</sup>の<sup>あらい</sup>霊<sup>れい</sup>に<sup>あらい</sup>よ<sup>あらい</sup>っ<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>支<sup>さ</sup>え<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>ください。主<sup>しゅ</sup>よ、わたし<sup>わが</sup>の<sup>あらい</sup>唇<sup>くちびる</sup>を<sup>あらい</sup>開<sup>ひら</sup>いて<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>ください。この<sup>あらい</sup>口<sup>くち</sup>は、あなた<sup>さん</sup>の<sup>あらい</sup>賛<sup>さん</sup>美<sup>び</sup>を<sup>あらい</sup>歌<sup>うた</sup>います。主<sup>しゅ</sup>イエ<sup>い</sup>ス<sup>え</sup>・キ<sup>き</sup>リス<sup>り</sup>ト<sup>と</sup>の<sup>あらい</sup>御<sup>おん</sup>名<sup>な</sup>に<sup>あらい</sup>よ<sup>あらい</sup>っ<sup>あらい</sup>て<sup>あらい</sup>。アー<sup>あ</sup>メン。 (詩<sup>し</sup>編<sup>へん</sup>51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたし<sup>わが</sup>の<sup>あらい</sup>ほ<sup>あらい</sup>か<sup>あらい</sup>に、何<sup>なに</sup>者<sup>もの</sup>を<sup>あらい</sup>も<sup>あらい</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>あらい</sup>して<sup>あらい</sup>は<sup>あらい</sup>な<sup>あらい</sup>ら<sup>あらい</sup>ない。
2. あなたは<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>あらい</sup>た<sup>あ</sup>め<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>刻<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>ん</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>あらい</sup>造<sup>つく</sup>っ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。それ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>に<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>伏<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。それ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>に<sup>あ</sup>仕<sup>つか</sup>え<sup>え</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。
3. あなたは、あなた<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>神<sup>かみ</sup>、主<sup>しゅ</sup>の<sup>あ</sup>名<sup>な</sup>を、み<sup>あ</sup>だ<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>唱<sup>とな</sup>え<sup>え</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。主<sup>しゅ</sup>は、み<sup>あ</sup>名<sup>な</sup>を<sup>あ</sup>み<sup>あ</sup>だ<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>唱<sup>とな</sup>え<sup>え</sup>る<sup>あ</sup>者<sup>もの</sup>を、罰<sup>ばつ</sup>し<sup>し</sup>ない<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>お<sup>あ</sup>か<sup>あ</sup>ない。
4. 安<sup>あん</sup>息<sup>そく</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>あ</sup>お<sup>あ</sup>ぼ<sup>あ</sup>え<sup>あ</sup>て、こ<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>聖<sup>せい</sup>と<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>よ。
5. あなた<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>父<sup>ちち</sup>と<sup>あ</sup>母<sup>はは</sup>を<sup>あ</sup>敬<sup>うや</sup>ま<sup>ま</sup>え。
6. あなた<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>殺<sup>ころ</sup>して<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。
7. あなた<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>姦<sup>かん</sup>淫<sup>いん</sup>して<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。
8. あなた<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>盗<sup>ぬす</sup>ん<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。
9. あなた<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>隣<sup>りん</sup>人<sup>じん</sup>に<sup>あ</sup>つ<sup>あ</sup>いて<sup>あ</sup>偽<sup>ぎ</sup>証<sup>しょう</sup>して<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。
10. あなた<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>隣<sup>りん</sup>人<sup>じん</sup>の<sup>あ</sup>家<sup>いえ</sup>を<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>ぼ<sup>あ</sup>つ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。隣<sup>りん</sup>人<sup>じん</sup>の<sup>あ</sup>妻<sup>つま</sup>、ま<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>べ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>隣<sup>りん</sup>人<sup>じん</sup>の<sup>あ</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>ぼ<sup>あ</sup>つ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ない。 (出<sup>しゅ</sup>エ<sup>い</sup>ジ<sup>じ</sup>プ<sup>ぷ</sup>ト<sup>と</sup>20、申<sup>あ</sup>命<sup>めい</sup>記<sup>き</sup>5)

\* 賛 美 歌 13:2 (ソングシート)

2. 人<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>し 救<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>子<sup>こ</sup>、主<sup>あ</sup>イエ<sup>あ</sup>ス<sup>あ</sup>よ、利<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>剣<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>言<sup>あ</sup>葉<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>示<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>給<sup>あ</sup>え<sup>あ</sup> ま<sup>あ</sup>こ<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>を。 ア<sup>あ</sup>ー<sup>あ</sup>メ<sup>あ</sup>ン

共同の祈禱 降誕節 第五主日 主の洗礼 (1月第三主日頃)

愛<sup>あ</sup>する<sup>あ</sup>神<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>ま、わ<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>ち<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>主<sup>あ</sup>イエ<sup>あ</sup>ス<sup>あ</sup>が、ヨ<sup>あ</sup>ル<sup>あ</sup>ダ<sup>あ</sup>ン<sup>あ</sup>川<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>洗<sup>あ</sup>礼<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>受<sup>あ</sup>け<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>き、聖<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>が<sup>あ</sup>鳩<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>よ

うに降り、天よりの御声が、主イエスを神の子であると宣言しました。

貧しい人々に福音をもたらし、捕われた人々に解放を宣言し、見えない人の目を開き、苦しめられていた人を自由にするために、主はキリストとして油注がれました。

わたしたちは洗礼によってキリストに結ばれ、主の働きにあずかるために召されたことを覚えて、心から御名を賛美します。(マタイ3、イザヤ35、ローマ6)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 東北伝道 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

子どもプログラム

聖書朗読 イザヤ49章1-6節 (旧約聖書1142頁)

フィリピ2章6-11節 (新約聖書363頁)

説教・祈祷 「神の子となる道」 杉山昌樹牧師

\* 賛美歌 31:1-2

1. さかえにみちたる 神のみやこは、千代経しいわおの いしづえかたく、  
すくいのおしがき たかくかこめば、み民のやすきを 誰かはみださん。

2. つきせぬ愛よりいのちのいずみ、ゆたかに湧きいでくめどつきねば、  
みくにの世嗣はかわくときなく、あふるるめぐみにたえずうるおうアーメン

\* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

\* 頌 栄 64

みめぐみあふるる 父、み子、みたまの ひとりのみ神に みさかえつきざれ。アーメン

\* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老 (司会・受付 次週：雨宮信長老)

本日 受付 1階：加藤良明・若月学執事 2階：森永美保執事 / ZOOMホスト・録音：番場駿也

次週 受付 1階：大日南隆夫・大日南信也執事 2階：藤井牧子執事 / ZOOMホスト・録音：森永翔馬

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

## 教会の現場で

昨年11月20日以来、久しぶりにフィリピ書を読みます。それで、直接関係のないことのように思われますが、明後日の教師会で伝道委員会として小さな懇談会を持つつもりでいます。そのテーマはこれからの東部中会の伝道についてです。改めて言うまでもありませんが、あちらこちらで伝道の困難が言われて久しいのです。教会として逆風に立っているというような見方ができなくもないのです。その中で、さあ、どうしようか、と思ってしまうてもそれはある程度仕方がないことかもしれません。とはいえ、それは何も今に始まったことではありません。キリスト教会はそもそも、最初からいつでも順風満帆だったのではないのです。むしろ、例えばこのフィリピの信徒への手紙をパウロが書きました時も、すべてが順調ではありませんでした。むしろ、この教会を開拓したパウロは囚われの身でした。教会の中には良い信仰があつたにもかかわらず、一部の役員の間に意見の不一致があつたようなのです。その意味では、これからどうしよう、という状態であつたらしいのです。そこでしかし、パウロはあまり具体的なことを書くのではなく、まずは教会の生き方を語り始めたのです。それも、教会員にああしなさい、こうしなさいという以前に、自分の生き方を語つたのです。それは1章にあります「生きるとはキリスト」という言葉です。それをてこにして、キリストと一緒に生きるとはどういうことかという視点で2章の最初の所でへりくだってお互いを大切にしていこう、ということが言われています。さらに、そのようなありかたは、イエス様にもみられるのだ、とあって、今日の所でイエス様のあり方を短い言葉でまとめている、というのがこのところの流れです。

## 教会のことば

ところで、この6節から11節のまとまりは、パウロが書いたものではない、とされています。もう少し正確に言いますと、パウロが他から書き写したのではないかと、言われています。キリスト教の歴史では、当然ですが聖書は教会よりも後から登場しています。さらに言いますと、福音書、マタイとかマルコといったものがまとまる前にパウロの手紙がまず書かれたのです。しかし、そのようなパウロの手紙が書かれる前から、教会は存在していました。そこで、礼拝がされていまして、信徒のための教育もされていまして。そのような教会の現場で、イエス様をほめたたえるために使われていたのが、この6節から11節にある言葉だったのではないかと、言われています。そして、この6-11節の言葉は、6-8節までと、9-11節までに分かれます。一応整理してみますと前半では、イエス様のへりくだったありかたのことが、そして後半ではイエス様の高い状態、天に昇られた状態を描いている、とされています。確かにその通りだと思います。しかし、それでは、パウロはわざわざこの詩文を引用して何を言いたかったのかが問われます。そこで今日は、この前半と後半で語られている、イエス様のあり方の意味はいったい何なのか、それを考えてみたいのです。

## キリストは何をしたのか

それでまずは前半のことばをいくつか確かめたいのです。最初はこうです。「キリストは神の身分でありながら」。この身分というのは、良い訳だと思います。新しい協会共同訳では「形」としています。でも、イエス様は、ただ形が神様を表しているというわけではありません。むしろ、本質とか、特性といったこと、人間なら人間の特性があります。わたしたちがいかに人間らしい、と感じられるところがあります。それは、例えば表面的には、道具や言葉を使うことだったり、自分を客観的に見て、過去や将来について思いめぐらしたりといったことからもっと深い人間らしさまでいろいろ言えるかもしれません。そのような人間らしさ、人間臭さとは対極であつたのがイエス様だったということがまず言われているのです。むしろ、神様とその特徴がまったく同じだったのです。これはなかなか、難しい話で、後にこれが神学用語としては、「神性」ということがでてきましてやがて、二性一人格ということも言われるようになっていきます。しかし、そのような理屈はともかくとして、ここでは最初に、イエス様は神様の性質を完全に持つておられたと言われています。先ほどの続きの所に「神と等しいもの」とありますのもその意味です。

## 人間として生き人間として死ぬ

でも、イエス様は、そのような状態にこだわらなかつた、と続きます。固執せず、とはそのような意味です。私たちそれぞれに、宝物のように感じていて、なかなか捨てられないものがあつたりします。イエス様にとって最も本質的でもあり大切なこと、それはきつとこの神様そのものであるという事実です。でも、そこにこだわらなかつた、それをポンと放り出してきつと人間になってしまった、このところは言います。それも、ただ人間になっただけではなく、僕になった、一番低い人になった、そして、事実、一番ダメな人間の行くところである十字架にかかつてしまった、そこまで徹底して、従順だった、死んでしまうことにまで従順というのは変な言い方ですけども、それは、本当に人間だった、それも一番低い人間になりきつた、という意味です。なぜこんなことが必要だったのでしょうか。それは、イエス様よりも低いところにいる人間が一人もいなくなるためです。イエス様よりも悪いところにいる人間が一人もいなくなるためです。イエス様が味わつたよりもひどい体験をする人が一人もいなくなるためです。毎年、毎年、多くの人が生まれ、死に、多くの幸いと共に、多くの悲惨が、悲劇が次々に襲ってくるこの世界において、神様の目の届かない人が一人もいなくなるためです。すべて生きて、死んでいく人、その一人一人に至るまで、イエス様と関係ない人がいなくなるためです。その一番低い底の底にイエス様は生きて死ぬことを選んだのです。

## そして生きるため引き上げた

その意味でイエス様は、徹底して人間として生きられました。しかし、それは、ここから新しいことが始まるためです。すでに確認しました通り、この詩文は、9節から新しい内容になります。今までは、イエス様が何をしたのかという書き方でした。イエス様は自分から人間となられました。しかし、このところからは、イエス様は何をされる立場です。言い換えますと、神様は何をしたのかという点に中心が移っています。この9節以下で一番大きなことは、神様がイエス様を引き上げられた、という出来事です。天に引き上げられたのです。神様の所へと引き上げられたのです。そして、これもまた、人間の新しいありかたを示すためです。コリント書にイエス様は復活において「眠りについた人たちの初穂となられました。」（コリントII5：20）という言葉があります。その意味で、これは、イエス様だけに関わることではないのです。このようにして、神様の所へと、神様と共に生きるありかたへと、人間は引き上げていただける、このことが、引き上げられたイエス様というありかたによって示されているのです。しかもそれで終わりではないのです。

## 主という名

ここで9節以下をもう一度読みます。「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」。ここではまず「名」という言葉に注目します。いうまでもなく、これは名前です。イエス様を何と呼ぶのかです。そして、神様は、イエス様にあらゆる名に優る名を与えられた、と続きます。これ以上はない名前、それは神様ご自身の名前です。少し話が飛びますが、たまに、聖書を読んでいて、「主」という名前が誰を指しているのかわからなくなる、ということを言われる方があります。神様のことを「主」と書いてあるところがある、イエス様のことを「主」と書いてあるところもある、いったいどっちなんですか、というのです。でも、これはどちらも正解です。なぜなら、神様が、ご自身の名前をイエス様に与えられたからです。イエス様も「主」と呼ばれるようになったのです。しかも、ただ「主」という呼び名をもらったのではなく、神様と同じ立場になられたのです。

## 我々は見上げる

「天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスのみ名に跪き」とあります通りです。天上のものは、天使たち、あるいは、悪魔すら入っているかもしれませぬ。地上のものは、人間と作られたもの一切です。地下のものというのは、おそらく当時の世界観においては、死んだ者たち、よみに下つたもの達です。そのようなこれまで、そしてこれから存在して、死んでいくものすべてが、イエス

様に膝をかがめる、そのような時がもう来ている、とこのところは言います。それは、私たちにとっては、いや、まだそのような様子は見ていない、と思ってしまう出来事かもしれません。しかし、ここでは、丁度、黙示録の最後の所で描かれているような、新しい神の国の様子が、描き出されています。そして、それは、決してただの幻ではありません。なぜなら、すでに、この一連の出来事は、イエス様において天で実現しているからです。そして、これもすでにお話ししました通り、イエス様は、これから人間がこうなっていくという意味での初穂でした。その意味で、私たちもまた、イエス様の前に跪くものとして、このイエス様のたどった道が続いて歩むのです。この地上の生涯を生き抜き、死に至り、そして、神様によって引き上げていただくのです。

#### 我々は告白する

そのようにしてこの地上を生きる私たちは、礼拝の度に「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえます」とこのところに書いてある通りのことを繰り返すのです。それは礼拝ばかりではありません。どのような時であっても、わたしたちが「主イエス・キリスト」と祈る時、それは、ただ機械的にそういつているのではないのです。むしろ、そのようにしてイエス様に呼び掛けます時に、それは、父なる神さまをほめたたえているのだ、というのです。「主イエス・キリスト」と呼びかける時に、その先に神様が見えるようになっていくというのです。こうして私たちはいつでも、毎日毎日、神様と共に生きるものとなります。

#### 神の子となる道

最初にお話ししました通り、このフィリピの信徒への手紙は、さあ、これからどうやって伝道していくか、どうやって教会を立て上げていくか、という問いの中で書かれたものです。そのような問いに対するパウロの答えがこれです。「主よ」と唱えて神様と一緒に生きていくこと、まずはそこからだ、というのです。わたしたちは、日ごろからあわただしい日常に生き、そのあわただしい日常がすべてとなって、神様を見失いそうになってばかりいるような気がします。けれども、ただ、主イエスと呼びかけるその時に、わたしたちは、もうすでに、神様の子とされていることを知らされるのです。イエス様の名を呼ぶことで、神様の子とされていることがわかるのです。そのようにして、私たちは、これからも神の子として生きていくのです。

#### 祈り

父なる神さま、尊いみ名を賛美します。あなたはそのご自身の名を、愛する独り子であるイエス・キリストにも与えられました。それは、わたしたちが、この方のみ名を賛美することであなたを賛美し、また、このみ名を通してあなたの子としていただくためでした。今やこのことはなりました。わたしたちがこれからも、この与えられたみ名を呼びつつ、喜びつつ、神の子として日々を生きることができるようにお導き下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン